

二高生としての生活が始まってから早いもので四ヶ月が過ぎ、新しい仲間と環境にすっかりなれたものだ。そのような中で行われた先日の二高東大研修は、二高生としての生活を省み、そして自分の将来について真剣に考える貴重な時間になった。書きたい事は山ほどあるが、今回はその中でも特に印象が強かった2つに焦点を当てたい。

まず一つ目は、笹川平和財団主催のディレクトフォースである。これは、各分野のエキスパートの方々のお話を伺い、自分の将来を考えるのに役立つという趣旨のもとで行われた。また、国際理解、国際交流及び国際協力の推進を図る笹川平和財団についても詳しく知る機会にもなった。講演やディベートのどれも面白く、そしてためになるものばかりで非常に有意義な時間であった。しかし、そのすべてをかけないため、ここでも一人に的をしぼり書きたいと思う。銀行員として世界をまたにかけて活躍された吉田 文一さんだ。彼は1942年に東京都に生まれ、慶応義塾大学経済学部卒業後、三菱銀行に入行された。主に国際金融を担当し、ロンドン、パリ、ヴェネズエラなどに在勤された。現在は産業能率大学教授、慶応大学非常勤講師などを経て、国際研究所代表、日本英語交流連盟理事をされている。このように世界で活躍されている吉田さんとの対話を通して最も感銘を受けたのは世界を時間と過去の出来事によって捉えるという考え方である。これは、経済のスペシャリストである吉田さんならではの視点だと思う。要するに、X-Yのグラフを作り、X軸を過去2000年間の時間として、Y軸を世界経済などの世界情勢とする。こうすることで、現在の状況を2000年という壮大なスケールで捉え、比較し、今後の展望を見出すことができる。例えば、現在はバブル崩壊後失われた20年と言われ、バブル崩壊後長い間経済の不調が続いている。そしてこの経済の停滞は終わりがなかなか見えない。しかし、ここで先程の視点を持ちて考えてみると、過去世界では何度も不景気になっているが必ずそこから脱している。そのため、現在の不景気も今後おそらく解消されるだろうと考えられる。私は、この考え方は経済のみならず多方面に応用できると思う。例えば勉強が挙げられる。勉強をする理由の一つはより広い視野をもち、物事を多角的に捉えられるようになることである。したがって、長い目で捉えようとする吉田さんの見方は、勉強の目的に通じているのである。勉強だけではなく、ほかにも同様だと思う。ここで、吉田さんに答えていただいた質問について書きたい。私のグループは、「世界と比較して、日本をどう思われますか？」という質問をした。この質問に吉田さんは、「日本はいい国だし、日本人みたいな人はどこにもいないよ。」とおっしゃった。その理由は、日本は世界の中でも安全な国である上、日本人が勤勉・誠実・感謝の心という性質を持っているからだそうだ。国内にいるとそれをほとんど実感しないように思うが、外から日本を見た時にやはりそれを強く感じるのだろうか？岡目八目というように、離れてこそ感じることもあるのだろうか。一方で、吉田さんは日本人の欠点も挙げられた。それは、他者に強調しすぎるために、自我や自主性が欠乏してしまうということである。これは一般的によく言われることだが、世界を見てきた方に言われるとその言葉に重みを感じた。さらに吉田さんは、この問題点を克服することが、グローバル化に対応するのに必要だと付け加えられた。このように吉田さんからたくさん学ぶ、そして深く考えさせられた。

二つ目は、企業訪問である。私の班は国立感染症研究所を訪問した。しかし、研究所の一般向けの見学は年に数回しか行われておらず、残念ですながら内部を見学できなかった。だが、研究所の布施晃先生からお話をいただいた。そのお話について書きたいと思う。(以下先生のお話)

そもそも感染症とは、微生物が体内に侵入し増殖することで発症するものだ。過去の大戦の死

者と比較してみると、第一・二次世界大戦の死者を合わせても約 2400 万人であるのに対し、ペストによる死者数は 1348～1350 年のたった二年間で約 2500 万人にも上る。さらに 1918～1919 年のスペイン風邪による死者数はなんとよんせんまんにん 4000 万人にもなるそうだ。今は医療技術が発達しているため、感染症の多くを治すことができるが、歴史的に見ると感染症は人類にとって大きな脅威であったと言える。しかし、現在でもエイズ、結核、マラリアなど一向に死者数が減らない感染症もある。また、グローバル化の進展にともない世界各地へ短時間で行けるようになった反面、感染症が容易に国内に入ってこれるようになった。そのため国内に感染症を入れず、また、入って来ても広めないようにするために、国内における感染症対策の拠点として国立感染症研究所が設立された。国立感染症研究所では感染症発生時の対応は、①監視（サーベイランス）②情報の収集③病原体の識別④診断法の開発⑤予防・治療法の開発⑥ワクチンの品質を保証するという六つのステップで対応する。こうすることで被害拡大を最小限に抑えることが可能そうだ。最後に質問で答えていただいたことを書きたい。「授業でインフルエンザは RNA ウイルスであり、次々と新しいタイプに変化するのに、なぜインフルエンザのワクチンを予想することができるのですか？」という質問に対し布施先生は、「あくまでもワクチンは、旧タイプのインフルエンザの傾向からおおまかに予想を立てることで、新種へある程度対策をするというものです。だからワクチンがまるっきり外れることもあるんですよ。」とおっしゃった。前から思っていた素朴な疑問が解決され、非常にすがすがしい気持ちになった。このように布施先生のお話を通して、感染症について様々なことを知ることができた上、生物に対する興味が沸いた。この二日間を振り返ってみて、改めて充実していたと感じる。笹川平和財団のディレクターフォーラムから始まり、企業訪問、OB・OG 懇談会、東大研修と、本当にたくさんの出来事が凝縮されていた。その中で自分の将来について、深く考えられただけでなく、様々な考え方に触れ視野が広まったと思う。東京に行っただけなのに、まるで世界を見たかのように感じたのは、やはりそれだけ自分は無知だったということだ。そして、アインシュタインの言葉を借りれば、「学ばば学ぶほど、自分がどれだけ無知であるか思い知らされる。自分の無知に気づけば気づくほど、より一層学びたくなる」のであり、世界をこの目で見てみたいという純粋な知的好奇心が芽生えた。そのためにも頑張って勉強をする必要がある。だからこそこれから最も頑張って行きたいと思う。



